大友氏歴代墳墓を巡る（八）

――十代親世・十一代親著――

古藤田　太
（会員・弥生町江良）

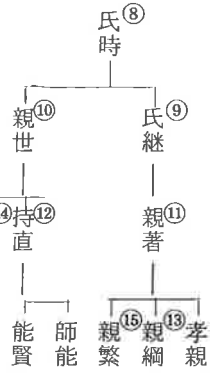
㈠　大友氏第十代親世

（法名）瑞光寺殿匠作大尹勝幢祖高大禅定門
　　応永二十五年戊戌二月二十五日逝去
（墓所）大分市元町十号線道路傍

志賀文書、宗家大友氏の系図には法名「祐高」となっている。誤りだろう。

右は常楽寺本大友氏系図に拠った。系図には親世の法名「祖高」は、親世の股に七十二の黒子（ホグロ）があったので、中国の故事に倣って祖高とした。これは漢の高祖に黒子が七十二あった故事に由来するものらしく、高祖を祖高と逆にしたにすぎない。

大友氏にあっては、天皇家の両統迭立に似た両氏の家督交立の時代があった。図のように、氏継系、親世系の交立である。



親世が兄氏継から家督を譲りうけたのは、応永四年（一三九七）以前のことだろうといわれている。氏継に子が無いためではない。

氏継の家督時代は南北朝動乱期で、しかも南朝方の最盛期で、懐良親王、菊池武光は大宰府に西征府をおき、九州征西の功ならんとしていた頃であった。

強大となった南朝方を向うに廻して、北朝方大友氏を率いる若い氏継、親世の兄弟は、まさに大友氏盛衰の岐路に立たされたわけである。

当時は、「家」の保持のためには、よく行なわれたように、兄弟の内一人が南朝方につけば大友氏は安泰と考えたものであろう。病弱であった兄、氏継の方が南朝方につくことで、大友氏保持のための話合が成立し、幼ない親著を親世に託し、家督を譲り、府内を後にして南朝方に投じた。

親世は、親著を愛育し、応永八年頃、大友氏の家督を自分の実子をおいて、この親著に譲ったものである。氏継の犠牲のもとにこそ大友氏の安泰が考えられたからである。

十代親世の墓

大友親世という人は大友氏中興の英主といわれる人で、彼の思慮深さが大友氏の隆盛をもたらしたわけである。

南朝方の隆盛もそう長くは続かなかった。応永四年（一三七一）今川了俊（貞世）が、九州探題として派遣されて、敗色濃き北朝軍の勢力挽回をはかった。極めて有能な了俊は忽ち大宰府を奪還し、南朝軍をジリジリと駆逐して肥後へと退却せしめた。南朝軍の中心勢力である菊池氏は最後の拠点菊池城に追い詰められた。

今川了俊は、最後の南朝軍攻撃を準備するため、大友、少弐、島津の軍勢を召集したが、少弐氏だけは召集に応じなかった。少弐氏の地理的位置からも、探題と利害関係が平素から対立してうまくゆかない。了俊は、島津氏久に頼んで少弐の出陣を促した。しぶしぶ出て来た少弐を招宴の席上で了俊は不意に殺してしまった。このため島津も激怒して、軍勢を引き揚げて帰国してしまった。

こうして、了俊が島津、少弐と対立抗争を続ける時、大友親世は探題と多少の距離をおきながらも漁夫の利を得たかたちで、大友氏隆盛の基礎をきずいていった。

明徳三年（一三九二）になって、南北朝の合体が将軍義満によって実現、五十年に亘る南北朝動乱は終った。義満は幕府体制の建て直しということで、九州に於ける南朝勢力の排除という功績を挙げた名将今川了俊の九州探題職を解任し、駿河国の守護に左遷した。

又九州探題を狙う野心家であった大内義弘もやがて足利義満に叛いて、「応永の乱」をおこし、この合戦で敗死した。

こうして野心家達が次々と消えて、大友親世は何時しか九州に於ける重鎮として実力を備えるに至った。大友氏中興の英主といわれる所以である。

親世は応永八年（一四〇一）に出家し、大友氏家督を兄氏継の子親著に譲った。親世が死んだのは、応永二十五年（一四一八）二月であった。

大友親世の墓をたずねた。大分市元町、元町石仏の手前の国道十号線に沿った路傍に近く、三米程の巨大な五輪塔型式の墓が建てられてあった。地輪に「応永二十五年戊戌二月二十五日逝」と刻まれ、側に樫、ヒバの木が二本植えられていた。朝夕十号線の喧騒を聞き、余りに俗界近き墓である。ここが大友氏中興の英主親世こと、瑞光寺殿祖高の永久の棲家であった。

(二) 大友氏第十一代親著

（法名）大恵寺殿前吏部侍郎玉菴道瑛大禅定門

応永三十三年丙午十一月二十九日逝去

（墓所）

一、宗家大友の系図、志賀文書には大恵寺を大慧寺とし、後年には恵を慧としたものが多い。

二、田北学氏の大友史料註記によれば、親著入道道瑛の死は永享十二年か、十三年の事也とある。

親著が生れて間もなく、父氏継は南朝方に転向して府内を去った。其の際親著は親世に託され、親世の愛育のもとに成長した。親世は自分の実子、持直、親隆をおいて応永二十三年（一四一六）十一月、親著に大友氏家督を譲った。将軍義持から豊後、筑後の二国を安堵されている。田北学氏が指摘するように、家督を譲ったのはもっと早かったかも知れない。

親世は応永二十五年に没し、五年後の応永三十年（一四二三）七月、親著は家督を親世の長男持直に譲った。

先代からの義理を大切にしたものであろう。そして、親著が家督を持直に譲った二年後の応永三十二年（一四二五）九月、親著の長男孝親が「三角畠の乱」をおこし、この乱で当の孝親は戦死し、親著は疵を蒙り、翌年応永三十三年十一月二十九日死んだ。と誌すものが多い。

しかし、田北氏によれば親著はなお永享十二、三年（一四四〇～四一）まで存命していると説いている。（阿蘇文書、鏡山文書、満済准后日記等の記事を指す）

この三角畠の乱は、単に家督相続の不満から叛乱をおこしたものでは無く、複雑な要素が絡って発生したものであるらしく考えられるようである。

十一代親著の墓

大内義弘以来九州進出の野望が続いている大内氏では、義弘の応永の乱の敗死後登場してきた盛見が、九州進出をはじめ、朝鮮、明貿易の基地博多を狙い、大友、少弐氏と利害関係の衝突から、大友、少弐の連合軍の前に敗れて、大内盛見は筑前萩原で自刃して果てた。

「三角畠の乱」は、この大内盛見が、応永三十二年（一四二五）九月、孝親等と謀って大友持直を抹殺せんと仕組んだ反乱だといわれている。

この大内盛見の「死」は幕府を異常なまで硬直させた。それは大内盛見が幕府の出先機関九州探題の強大な護衛軍であるばかりでなく、幕府の博多直接支配の工作者であったから、大内盛見の「死」は幕府に対する挑戦と解されたものである。

かくして、大友持直の幕府に対する抵抗は姫嶽の大戦となり、又派生的には大内氏の堅田、宮内、代後浦侵攻であり、嘉吉の乱の赤松満祐に対する持直助勢となってあらわれ、関係することが多い。

親著は姫嶽戦前後まで持直軍の中で活躍しているようである。

中世の武将がそうであったように、親著も深く仏教に

帰依していた。大友氏系図の附記によると、応永年中、親著が鶴見岳に登った時、鶴が空高く舞っていたが、その鶴の降り立った所を仏法有縁の地とさとって一寺を建立した。嘉慶元年（一三八七）頃らしい。その地が海部郡久所村で、寺は雲鶴山、大恵寺であった。この寺に、大祖大友能直所持の仏舎利三粒、一寸八分の白木造の阿弥陀像を五層塔を造営して安置したという。

親著の建立した大恵寺の遺跡や、親著の墓をたずねたいと、盆近い夏の日に大分市役所坂ノ市支所を訪ねた。岩上という若い職員が親切に案内してくれた。行きつ、戻りつ、仲々「鶴の降り立った」大恵寺跡がわからない。辛うじて其の地を尋ね当てたが、丹川字上久所の田圃の中に、夏草繁り、一坪程取り残されたように一段と高くなった墓地があった。かつてこの辺りが野原であり、その後田圃となったものだろう。

今は一群の墓石がならぶ小高い位置に「大友拾代陸奥守源親著公……。応永三十三丙午十一月二十九日逝」と読める墓塔があった。安永五年（一七六六）に建てかえられたものである。墓石は左側が損傷していて真に痛痛しい。

この大恵寺（大慧寺）を、明応二年（一四九三）大友義右が修理を加え、寺名を大智寺と改めた。修理を加えた寺がこの頃東新町にあったものか、今では全く解らない。

寺伝によると、開山は独芳（情曇）禅師で、義右の修理後の大智寺には京都南禅寺の才伯禅師が招ぜられて住持となったということである。義右はこの寺に葬られたというが、墓は現存しない。